福井市立郷土歴史博物館
Fukui City History Museum
松平家史料展示室　展示解説シートNo.91

平成27年秋季特別展

大名華族たちの明治

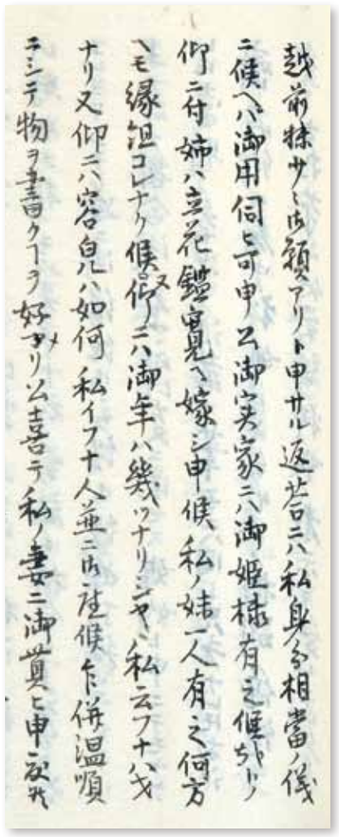
●主　催　福井市立郷土歴史博物館
●会　場　企画展示室
●会　期　平成27年10月16日(金)～11月23日(祝)
●休館日　11月5日(木)

大名たちは明治維新を経て「華族」という階級に位置づけられました。近代国家日本を支えていく役割を担った大名華族たちは、大きく変わっていく時代の波に翻弄され、時には矛盾を感じながらも、それぞれの方法で華族としての役割を果たすべく活動をくりひろげます。

本展では旧福井藩主松平春嶽、侯爵鍋島直大、伯爵立花寛治を中心として、新しい時代における華族たちの思いや行動をうかがう資料、華族としての威儀を支えた資料を展示し、近代国家の黎明期における大名華族たちの姿を紹介します。

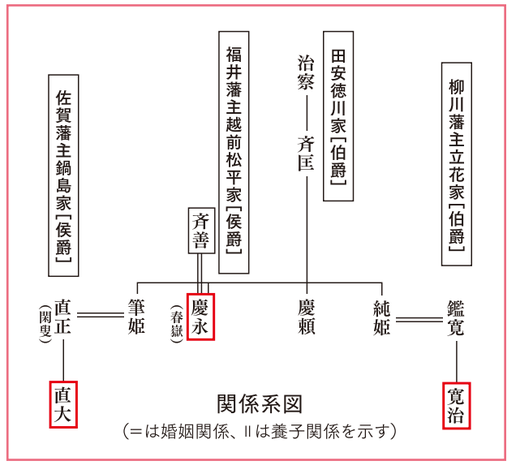
序章　華の縁 ―松平春嶽と鍋島家・立花家

旧佐賀藩主鍋島家（侯爵）、旧柳川藩主立花家（伯爵）、旧福井藩主越前松平家（侯爵）は、福井藩第16代藩主であった松平春嶽とその実家である田安徳川家を介して、密接なつながりを有していました。



筆子略伝（福井市春嶽公記念文庫）

筆姫についての春嶽と鍋島直正のやりとり。三行目に「姉ハ立花鑑寛へ嫁シ申候」文末に「私ノ妻ニ御貰ヒ申度候」



関係系図
（＝は婚姻関係、‖は養子関係を示す）

純姫肖像写真
福井市春嶽公記念文庫

筆姫肖像写真
福井市春嶽公記念文庫

Ⅲ　華族、筆をとる ―華族・松平春嶽

松平春嶽肖像画
福井市春嶽公記念文庫

松平春嶽（しゅんがく）は王政復古を経て議定兼内国事務局輔、民部卿などを歴任しますが、しだいに薩摩・長州出身者中心の政府において存在感を失っていきます。大学別当兼侍読を経て明治３年（1870）７月に公職を退いた後は、執筆を中心に活動を行います。幕末維新期における逸事をまとめた『逸事史補』や、旧領福井で見聞したことを記した『真雪草紙』などを完成させ、一方では福沢諭吉などの知識人と交わるなど、年齢を経てなお積極的に活動する様子が窺えます。

また、華族の重鎮として明治天皇に近侍することも多く、天皇からは花瓶や御衣などを拝領しています。明治６年には春嶽の住まいを天皇が訪問(行幸)しており、明治天皇と春嶽の密接な関わりを窺うことができます。

鋳銅金銀象嵌花瓶（福井市春嶽公記念文庫）

松平春嶽宛福沢諭吉自著献呈本『通俗国権論』（福井市春嶽公記念文庫）

ボンボニエール（五種）（福井市春嶽公記念文庫）

関連イベント

記念講演会「華族会館から霞会館へ」

- ■日 時　10月25日(日) 14時～15時
- ■場 所　当館2階講堂
- ■講 師　松平宗紀 当館名誉館長（越前松平家第20代当主、一般社団法人霞会館常務理事）
- ■定 員　100名（聴講無料・当日先着順）　※当日13時より整理券を配布します

ギャラリートーク（担当学芸員による展示解説）

- ■日 時　10月18日(日)、11月1日(日)、3日(火祝)、8日(日)、15日(日)、22日(日)、23日(月祝)
  各日とも14時から（50分程度）

展示解説シートNo.91
平成27年10月16日発行

福井市立郷土歴史博物館
〒910-0004 福井市宝永3-12-1
電話 0776－21－0489
Fax　0776－21－1489
担当：田中伸卓

印刷：㈱リンクコーポレーション

Ⅰ　華族、海を渡る ―侯爵・鍋島直大

鍋島直大像
公益財団法人鍋島報效会蔵

最後の佐賀藩主であった鍋島直大（なべしまなおひろ）は二度の海外留学を経て、明治13年（1880）に特命全権公使としてイタリアへ赴任し、公使館で大夜会を開くなど外交の舞台で活躍しました。

帰国後は元老院議官・式部頭などを務め、一方で晩餐会に向けて華族などに舞踏を教えるなど、いわゆる鹿鳴館外交においても活躍します。一方で直大は日本古来の音楽である雅楽の普及を志します。滞欧経験豊富な直大は各国がそれぞれ特有の音楽や文学を持ち、それを大切にしていることを知っており、欧米崇拝の気風が盛んであった当時の風潮を憂慮していたようです。

また、直大は明治15年５月に式部頭に任命されて以降式部長官、式部長として皇室の儀式、雅楽などに関わりました。儀式の際、たびたび天皇に代わって代拝を行っており、明治天皇の信頼が厚かったことが窺えます。天皇からは折に触れて美術工芸品なども下賜されています。

仮装舞踏服（鍋島直大・栄子所用）
公益財団法人鍋島報效会蔵

菊御紋付牡丹孔雀象嵌銀製花瓶
公益財団法人鍋島報效会蔵

菊御紋付化粧道具
公益財団法人鍋島報效会蔵

笙
公益財団法人鍋島報效会蔵

篳篥　銘　秋風
公益財団法人鍋島報效会蔵

Ⅱ　華族、土を耕す ―伯爵・立花寛治

立花寛治像
公益財団法人立花家史料館蔵

立花寛治（ともはる）は最後の柳川藩主であった鑑寛の次男として生まれ、兄の死去と父の隠居に伴い家督を継ぎました。寛治は新しい社会の発展には農業の振興が必要と考え、東京から柳川へ居住地を移し、立花家農事試験場を開きました。彼の理想と決意は、明治21年（1888）開場式の式辞として述べられています。理論を実地に応用すること、良い種苗を求め人々に分けること、そして農事改良によって国家の利益を増やすこと。彼の目指すところは国の発展にあったのです。

また、寛治は明治43年に立花邸を新築しました。迎賓館として用いられる西洋館には、晩餐の席のための洋食器類が用意されました。ガラスや磁器で作られた美しい食器は、ディナーの席に彩りを添えたことでしょう。

果物写生帖
公益財団法人立花家史料館蔵

花葉写生帖
公益財団法人立花家史料館蔵

色絵雲龍文大花瓶
公益財団法人立花家史料館蔵

幾何文ワイングラス
公益財団法人立花家史料館蔵

染付金彩御紋入りティーセット
公益財団法人立花家史料館蔵